

新渡戸稲造と修養

新渡戸稲造と修養

新渡戸稲造が活躍した舞台は、広範囲にわたり、それぞれの領域で彼がのこしたものは、驚異に値する。

学校教育者、社会教育者、さらに国際連盟の事務次長という国際人としての活躍など、獅子奮迅の努力がみられる。

彼の果たした思想的役割について、鶴見俊輔は、次のようにのべている。

「新渡戸の思想は、明治後期から、大正をへて、昭和のはじめまで日本を指導した。というのは、この人からしたしくおしえをうけた人たちが、日本の官僚の中心となって、大正・昭和時代の日本国家の動きを管理して来たからである。新渡戸の思想は、この時代における日本官僚の思想のもっともすぐれた範型の一つ

綱澤 満 昭

をつくった。この意味では、福沢の影響力が実業界・新聞界に主として発揮されたのと対照的である。⁽⁴⁾

札幌農学校、京都帝国大学、東京帝国大学、第一高等学校、東京女子大学などで、新渡戸の聲咳に接し、信賴し、尊敬し、師としての彼を高く評価した人は多い。新渡戸の薫陶を受け大きく成長した人の数は枚挙に遑がない。

『新渡戸稲造全集』(教文館、昭和十一年)の「別巻」に収録されている追憶集執筆者の顔ぶれをみるだけでも、そのことは明らかである。学者、教育者、政治家、官僚、言論人など、まさしく日本の近代国家の運営を担った人物たちが登場している。このことは、新渡戸の教育思想のなかに、時流に抗するものが散見出来るとはいえず、忠君愛国の軌道からはずれることなく、国際社会のなかで新生日本を創造し、建設してゆくにふ

さわしい内容が組み込まれていたということなのである。

しかし、彼が達成した仕事と、日本人の多くが、あるいは日本国家が将来にわたって幸福な道を歩むことになったかということとは、別問題である。

新渡戸の薫陶を受けた一人である岩切重雄（前商工政務次官）は「一高時代の新渡戸先生」という文章で次のような評価をしている。

「私が一高に入学したのは明治三十九年でしたが、その年に新渡戸先生が校長になって来られた。：（略）：そしてその人格の力で生徒をグングン動かして行った。：（略）：その力が極端に生徒を引きつけるやうになったやうです。所謂新渡戸宗なるものが出来た訳です。毎週一度づゝ修身の講義がある、ソシアリチーの話がある、カーライルの講義がある、力ある先生の一言一句はこれらの講義や座談会の場合を通じて学生の胸を突いたやうです。恐らく新渡戸先生位、校長さんとして、生徒を動かした先生はないのではないかと思われます。」²¹

ここで岩切も記しているように、新渡戸が第一高等学校の校長に、時の文部大臣牧野伸顕にこわれて着任

したのは、明治三十九年九月であったが、この時期はいうまでもなく、日露戦争直後であった。この戦争で日本は勝利したとはいうものの、膨大な軍事費の流出もあって、国家の財政は逼迫し、人心は千々に乱れ、種々の社会混乱が生じていた。一高には偏狭な国家主義や排他主義が吹き荒れていた。こうした憂慮すべき環境のなかで、国家にとつては新しいかたちのリーダーが不可欠のものとなっていた。いわば開かれた日本の代表としての実力養成が焦眉の課題となっていたのである。国際競争に敗北しない人間が持望されていたのである。

宮坂広作は、そのことに触れて、こうのべている。「日露戦争後の国際化、つまり日本の大國化に伴った国民の、しかもエリート形成を担う職務を果すべく、新渡戸は一高に登場したのであった。決して名利を超えて内面の問題に沈潜すること、つまり『人格の修養』への没入を説いたわけではなく、西欧列強のリーダーに見劣ることのない、見識と実力を備えた、国家の英才を育成することを任務としていたのである。」²²

この役割を任うべき校長として、新渡戸は望まれ、

選ばれたわけである。彼個人の特徴はあるにしても、大枠として国家の方針に逆らうことは、彼の望むところでもなかった。可能となったことは、それまでの一高の諸々の陋習を打破し、国家の要請に新しく対応するということであつた。陋習というものは、権力にとつて無気味な存在となる場合がある。国家を指導してゆく新しい力とは何か。そこには角を折られ骨抜きにされた優良生徒の養成があつた。新しい一高の風とはそういう類のものであつたのかもしれない。とにかくにも新渡戸は、古いものを捨て、新しいものを創造しようとしたことは間違いないことであつた。森戸辰男は、新渡戸の新風について次のようにのべている。

「間もなく、その東洋豪傑気取りの、また軍国主義的影響の濃い『校風』に何となく不満を感ずるに至つた。…(略)…かやうな新時代の要求に対して伝統的な一高校風は、与ふべき何ものをも持ち合はしてあなかつた。新時代に呼吸せんと熱求する青年とこの老衰せんとする旧校風とを背景として見るとき、先生の巨姿は一段とくつきり浮び出るのである。…(略)…當時は一高校風の改革時代で、先生自身がこの新風建設

の指導的な力であつたのだ、といふべきであるかもしれないが。⁽⁴⁾」

かたくなな国粹主義などの陋習を排除し、新しい国際感覚を持ったいわゆる新進官僚の養成を旨とすることを彼は一高の校風にしようとしたのである。

新渡戸は大学や一高での学生、生徒を相手にしたただけでなく、それ以外の青年、婦人のための、いわゆる社会教育にも、力をそそいだのである。各種雑誌を通じて、学校以外の場でも、人生の師としての役割を果たすことになる。ここに他の学者と違う新渡戸の特徴がある。

諸々の雑誌に人生訓話的なものを発表しつつ、己の思いを吐露している。なかでも明治三十年に創刊された『実業之日本』(実業之日本社発行)と新渡戸の結びつきには強いものがある。創刊号には前田正名や横井時敬らがその名をつらねている。

新渡戸はこの雑誌に多くの修養論、人生訓話的なものを披瀝しただけではなく、実業之日本社社長の増田義一の要請を受け入れ、編集顧問の任まで引き受けている。引き受けるに際しては、彼にも躊躇するところ

はあったが、増田の熱意にほだされ引き受けたようである。

新渡戸は「余は何故事業之日本社の編集顧問となりたるか」という一文をものしている。

「僕の如きものに対し斯まで熱情を披瀝された厚意は僕の深く謝する所であるが、僕は氏の要求を悉く容れることが出来なかつた。其後社長とも再三面会し、社の主義方針等を聞き、僕が平素懷抱して居た主義と相一致するのと、又微力な僕に対する誠意が洵に熱烈なるものあるを見、再考、三考、終に現職に妨げなき範圍に於て編集顧問として微力を尽すことを承諾した。⁵⁵⁾」

新渡戸の社会的地位など、彼をとりまく環境もあつてのことか、無条件で編集顧問を引受けることには、かなりの抵抗があつたようである。しかし彼には他の一般の学者と違い、象牙の塔にとどまることに満足は出来なかつた。彼には学問の社会化というか、実践的社會教育への野心があつたといえよう。

高官であり、一流の学者、教育者であるにもかかわらず、己は学歴と教養を自慢している他と違い、民衆の日常にも耳を傾け、彼らに対し、平易な言葉で人の

道を論じてやるのだという傲慢さを新渡戸のなかに、かいまみることが出来ないか。新渡戸の言は次のように続く。

『実業之日本』は高尚なことを説かないで、卑近な何人にも解り易く、又何人も知らなければならぬことを説て居る。恰度今述べた所と一致して居るではないか。是れ僕が顧問を承諾して微力を尽くさんとする第二の理由である。⁵⁶⁾」

高所から民衆を見下す姿勢が如実にみてとれる。それでもこの新渡戸の文章を真剣に読み、反応を示す多くの読者がいたことに、彼は驚きにもちかい喜びを感じたのである。この歓迎ぶりに新渡戸の精神はいよいよ昂揚していった。

彼はこの雑誌に、修養、人の道、などに関する自説を次々と発表し、広く民衆の啓蒙に努めたつもりである。雑誌に発表されたものは、やがてこの実業之日本社から単行本として出版された。大好評であり、『修養』(明治四十四年刊)などは驚異的な売れゆきを示したのである。

実業之日本社の社長である増田は、新渡戸の協力に対する感謝の気持を次のように披瀝している。

「吾社の博士に負ふところは真に多大である。殊に博士の誌上説かるゝ教訓によつて、煩悶を去り、悪癖を矯正し、勇気を鼓舞し、志を立て奮闘努力したるもの多く、且つその教訓を実行したるもの亦少なくない。(略)博士の著書『修養』『世渡りの道』『自警録』『一日一言』『東西相触れて』『偉人群像』『内観外望』等は吾社より発行して、思想を善導したるの効果頗る大なりと信じてゐる。『修養』の如きは百四十版を突破して居る。」⁽⁵⁾

新渡戸の雑誌へのかかわりをめぐつては、必ずしも讃辞があるばかりではなかつた。世間の眼には、かなり厳しいものもあつた。通俗雑誌への寄稿など、大学教授、一高校長たるものの行為にあらず、厳に慎むべきとの声があつたのである。政治学者小野塚喜平次などもその一人であつた。南原繁のあとに東京大学総長となつた矢内原忠雄は、当時の世情をこう記している。「当時先生は『実業之日本』に毎号修養談を出された。そこで通俗雑誌に下らない事を書いてゐる、卑近な道徳を説いてばかりゐて校長たる職を空しくして居る、原稿料をかせいである、売名、八方美人等と、新聞雑誌に罵言讒謗されて、先生攻撃を看板にする雑誌

さへあつた。」⁽⁶⁾

このような世間の風評に対し、新渡戸は彼なりに反応し、ことに尊敬する仲間からの助言、忠告に対しては、一応耳を傾け、深刻に受けとめることもないではなかつた。しかし最終的には、社会教育に対する責務という大義を優先させ、この種の雑誌への寄稿をやめることはなかつた。雑誌も単行本も好評で、販売数も全国に拡大していった。新渡戸の名はいよいよ全国的なものとなつた。

ところで、新渡戸は『実業之日本』に何を寄稿したのであろうか。『修養』に限定して覗いてみたい。

彼は「修養とは修身養神といふことであらう。身心との健全なる発達を図るのが其目的である。」⁽⁷⁾という。身近なところに次々と課題を設定し、それを身体を使いながら、一つ一つ根気よく克服してゆくことを通して人格のなかに精神が宿る状態になつてゆくことなのである。

この修養を限りなく積み重ねてゆくうちに、平凡が非凡の領域にまで到達可能となる。「修養あるものは地味で、人目に立たぬかも知れぬが、己に省みて、修養のない人が到底遠く及ばぬ安ずる所がある。」⁽⁸⁾とも

いう。

功名心、立身出世などに拘泥することなく、いかなる状況下にあっても、己の果すべき役割を果し、常に耐えぬき、自足し、そこに至福の時を持ち、己を創造せんとするところに新渡戸の修養論の到達点があった。彼はこういう。

「功名高貴は修養の目的とすべきものではない。自ら省みて屑しきょうしとし、如何に貧乏しても心の中には満足し、如何に誹謗を受けても、自ら樂しみ、如何に逆境に陥っても、其中に幸福を感じ、感激の念を以て世を渡らうとする。それが、僕の茲に説かんとする修養法の目的である。」¹¹⁾

国家批判、社会批判の眼はどこにもなく、階級対立を隠蔽し、社会的矛盾を個人の忍耐と努力という心情の世界で解消せんとする新渡戸独特の説教である。いかなる境遇に置かれても、実践すべき目標をかかげ、怠ることなくそれを継続するところに修養の道があるというのである。国家、社会の批判はいうまでもなく、天下国家を論じたり、英雄、偉人を目指すことも、修養の道からははずされる。次のようなことを継続して実践せよ、という。

「普通の人には容易いことで、只少し嫌やと思ふ位のことを選んで、継続心を鍛練するがよい。例へば飲食のこと、冷水を浴びる、毎日日記をつける、散歩をする、一定の時間には必ず起床する、食事の前には民の恩の涯きを思ふ、毎日何回とか日を定めて神社に参詣する、両親其他の命日には花を捧げるといふ様に、一寸見ると何でもない、只少し行にくい所がある位のことを、毎日繰返し繰返し行ふがよい。」¹²⁾

屁屈をならべるのではなく、まず行動、実践である。この行為のなかに新渡戸の修養の型がある。修養とは語るのではなく、与えられた環境のなかで、身体を動かし、精神を鍛えること、つまり行動であった。

この時期、修養を語ったのは、なにも新渡戸に限ったことではない。明治の後半から大正にかけて、この修養は一つの流行語となっていた。つまり時代が修養を必要としていたのである。このことは、日露戦争後における国家の国民統治の問題と深くかかわってくるのである。

日露戦争は一応日本の勝利ということになってはいが、戦後財政は破局に近いほどの危機的狀態に陥っ

ていた。勝利による弛緩と驕慢と頽落ムードが混然となつて国民の間に充満し、私利利害への執着が一般化し、国家至上主義的人間像は、極端に色あせていった。社会主義思想、運動も一方で活発化した。国家からの個人の離脱現象は、国家にとつて、統括上の一大危機となるものであつた。

ヨーロッパ列強に伍してゆくためには、なお一層の「強力」が必要なのはいうまでもないが、それと同時に、一般民衆の統治、なかならず若者のエネルギー吸収が焦眉の課題となつていたのである。

国家の将来を玄関口でリードしてゆく新進官僚の育成が日程にのぼるのはいうまでもないが、この時期になつて、にわか注目され、期待される人たちがいた。勤労、忍耐、忠誠といった徳目になつてくれる地方の若者たちがそれであつた。

広島県沼隈郡で小学校の教師をしていた山本灌之助は、地方に生きる若者を「路傍に棄てらるゝ青年」と呼んだ。

中央の学生のみが、日本の将来を背負う青年であるかのように、囑望され、注目され、脚光をあびていたのに対し、山本は地方の若者に注目し、国家及び中央

言論界の彼らに対する冷酷無慈悲な態度に、憤怒の情を燃やす。同時に地方の若者のふがいなさをも指摘した。

明治二十九年、山本は『田舎青年』のなかで次のように絶叫している。

「拳世滔々、青年を以て学生の別号なりとし、青年と云へば一も二もなく直ちに学生を以て之に答ふ、ここに於てか、学生にあらざるものは青年にして青年たること能はず、今や都会僅々数万の学生、独り時を得て騰揚潤歩し、全国青年の大部百万人の田舎青年は、殆ど自屈自捨蟄居縮小せり。抑も青年の青年たる所以のものは心にありて形にあらず、区々たる學術技芸にあらずして、精神氣象に在り。」¹⁰⁾

『田舎青年』を公にした山本は、全国の青年集団（若者組、若衆組）の改造、結成をはかることに心血を注いだ。彼らに国家の一員としての誇りを抱かせるべく、その機会を与えようとした。様々な言動を通じ、山本の名は中央に知られることとなり、青年団の生みの親としての地位を獲得していったのである。山本の仕事は、日本青年団史のなかで、燦然と輝いている。¹¹⁾

しかし、若者組、若連中が官製化され、全国的組織、つまり大日本青年団となってゆくことが、地方の若者にとつて、真に幸福であつたということについては異論もある。

山本の地方の若者と国家の結びつきは、帰するところ次のようなものになつてしまふのである。

「農民は国家経済の基礎を為し諸種の点より物質的精神的一国興隆の原動力たり得るものなり、如斯国家重要な地位にある農民未来の継承者たり、亦現在農家の所謂働き手たる青年を以て組織したる所の団体即ち若連中なるもの、国家社会に対して如何に貴重なる地位に在るかは容易に之れを推知し得らるゝなり。：(略)：今日の時局に際して出で、戦へる所の幾十百万の兵卒なる者は多くは所謂若連中の一員たり出身者たらざるはなく、：(略)：然れば国家未曾有の重大たる現戦役の如き、其の大部は全く若連中の手に依りて行はるゝもの」⁽⁵⁾

国家に対し、地方の学歴なき若者が担うべき役割がよく描かれていないか。

若者組、若連中などと呼ばれ、ムラのなかで自足し、諸々の役割を担い、若いエネルギーを蓄積、発散させ

ていた集団が、にわかに国家を意識し、国家的責務を負うという画的集団に転換してゆく物語がここにはあつたのである。しかもそれは、国家を底辺で支える、つまり縁の下の力持ち的存在となるものであつた。

これは同じ時代の学生らに期待された「国家的任務」とは似て非なるものであつた。⁽⁶⁾

偉人、英雄の道を締め、栄達を捨て、あくまでも遠く深い地点で、間接的に国家を忍耐でもって支え、批判精神を欠落させた若者が待ち望まれたのである。はじめから国家的リーダーの人口も椅子もないのであるが、それでも己が国家的役割、使命を抱けるといふことはムラを全宇宙として生きてきた若者にとつては、青天の霹靂ではあるが、千載一遇の好期となるものでもあつたにちがいない。

国家的要望、狙いと地方の若者との利害とが、ここで奇しくも一致したのである。この山本の青年団運動もそうであるが、蓮沼門三の修養団運動なども、こうした背景のなかでの地方の若者の誘導、集結、統一であつた。若者の大部分をしめる地方青年の統括は、この時期の国家の重要政策の一つとなつていたのである。修養でもって若者をくくるべく精神教育が社会教育の

中心テーマとなった。

国家のために、という大義名分をかかげながらの精神訓話のなかに、多くの若者は溶解されていった。その場での懸命の努力目標は、他によって与えられたものであった。

新渡戸の修養論は、このあたりのところで極めて重要な役割を担うこととなる。

単行本となった『修養』の「序」の部分で、彼は「専門学の余暇」という言葉を使い、この余暇に気楽に書いたもので、この書が通俗的なものであることを認めている。しかしこの「序」は次のように結ばれているのである。

「若し本書にして、一人にても二人にても、迷ふものゝ、為に指導者となり、落胆せんとする者に力を添え、泣くもの、涙を拭ひ、不満の者の心をなだめ得るなら、これぞ著者望外の幸であり、又年令も恥も忘れた甲斐があったと思ひ、深く読者に感謝する。」⁵⁷⁾

出世の道は望むべくもなく、社会の隅で諸々の矛盾、軋轢を背負いながら苦悩し、呻吟する人たちに心中に、新渡戸は巧みに入っていた。

『修養』の目次をいくつかあげてみると、「青年の立

志」、「職業の選択」、「決心の継続」、「勇気の修養」、「克己の工夫」、「逆境にある時の心得」、「黙視」、「暑中の修養」などである。

内容を少し覗いてみよう。「青年の立志」には次のような言辞がみられる。

「僕は青年が志を立てる時には、名とか利とかを求めないで、先づ任務は如何なるものであるかを見て、決して貰いたい。名利の夢を離れて冷静に、私心を離れて公正に考へて貰いたい。」⁵⁸⁾

青雲の志はあつてもよいが、それが己の小さな自我、出世欲に向つてはならず、与えられた環境のなかで、己に課された任務を肅々と実践することが肝要だというのである。

「職業の選択」ではこんなことをいつている。

「各人が充分に其天賦の才を発揮すれば、其が国家社会といふ言葉の耳触の宜いのに眩され、技芸技術を卑む風がある。」⁵⁹⁾

「逆境にある時の心情」では、たとえいかなる逆境に遭遇しても、他人や世の中に責任を転嫁してはならず、己自身が耐え忍ばなくてはならない。と次のようにいう。

「逆境に陥つたならば、逆境そのものを善用して、我精神の修養に供するが宜い。：（中略）：雨降らば降れ、風吹かば吹け、身はひた濡にぬれながらも、行く所までは行くといふ覚悟で：（略）：僕は寧ろ飽までも逆境に堪え忍び、終には逆境そのものより、或る修業を求める様にしたい。」³³

要するに新渡戸の修養論は、多くの若者がある地位にしびりつけ、功名とか富貴とか、栄華といった野心、野望を粉碎しながら、しかも懷疑心、煩悶、逃避を許さぬといったもので、それぞれの領域で被支配者として勤勞にいそしみ、身体を鍛え、人格をみがき、「立派」な人間になることの奨励という「知足」の思想であった。

やせ細った国家批判、体制批判に価値があるというわけではないが、新渡戸の修養論には、権力からの自立という面が大きく欠落している。エリートとは別の帝国主義日本を根底のところを支える肉体的精神的教育が必要だったのである。つまり被支配者としての人間養成が国家の一つの使命であり、新渡戸はそれに大きく手を貸したということになる。

真の修養というものは、あらゆる権力から自立する

ものであるし、それ自身で自足し、完結するものである。³⁴しかし、そのためには徹底した拒絶の精神が必要となる。このことが少しでも欠けると、国家権力はそれを利用しかかる。なまなかな自己犠牲的精神ほど、国家が喜んで吸引するものはない。ナシヨナリズムの昂揚期、あるいは国家の国民統治機能が衰弱したとき、その傾向は最高のものとなる。

新渡戸の場合は、彼自身があるところで妥協し禁欲も忍耐も自虐もほどほどで、またそれはいかなる段階においてもベースとして通用するものとなっていた。

ヨーロッパ的「知」、アメリカ的「知」、なかんずく、キリスト教的「知」を豊富に持ち合わせながらも、儒教、仏教、神道など日本社会が共通項として持っている概念を、不断に使用しながら、修養論を展開したところに、新渡戸の面目躍如たるものがある。

しかし、いかなる組み合わせであろうと、彼の修養論が、天皇制国家の強権に対し、対抗出来るようなものではなかった。

この新渡戸の修養論は、従来のものに較べる時、極めて積極的で明るい未来を期待するものであるとの評価もある。たとえば、武田清子は次のように評価して

いる。

「彼がたとえば従来、日本でよく用いられて来た『修養』とか『克己』とかいう用語を用いて語っていても、それは従来への消極的、諦観的な要素を含んだそれではなくて、全く質の異なった積極的、開拓的なものと考え方、人生態度を本質としているということである。」²³

また武田はこもいう。

「新渡戸は、伝統的規範をあらゆる用語に新しい思想内容を託し、伝統的な人生訓の説き方と同じような論旨の運びに見えつつも、その中に新しい人生観を注ぎこもうとしているのである。彼はまさしく『古い皮袋』に『新しい酒』をもり、新しい酒をして何時の間にか皮袋をも新しいものにと革新せしめようと試みていたのである。」²⁴

旧価値、伝統は概念を継承しながらも、それを突き破り、漸次新しい価値を創造しようとした点を、武田は高く評価しているのである。たしかに表面的、現象的にみればそうであろう。しかし問題は新渡戸が創造しようとした新しい価値とはいかなる方向性を持つものなのかということである。ただ単に新しい時代に合

わせようとする価値は、権力によって利用されるだけである。

旧概念のなかに新しい内容を入れ、次第にそれは元の姿からは遠のいてゆくというのであるが、私にはこの点にこそ、新渡戸の巧妙な民衆把握の手法があったように思えてしまう。

それは決して、赤裸々な民衆統治策ではなく、じつにしなやかで、やさしさを伴うものであった。多くの人が新渡戸のやさしさを認める。しかしそのやさしさのなかにこそ、かくされた民衆統治の技術を見抜かなければならない。新渡戸の著書が、転向対策としても利用されたことについて、鶴見俊輔は次のようにのべている。

「大正時代の新人会コース、昭和はじめの共産党コースから、息子や娘をさそいだすための有力な転向コースとして、新渡戸の著書は、親たちによって熱心に読まれた。子供たちが福本和夫（一八九四〜）の著書に読みふけるのと平行して、父親、母親たちは新渡戸の著書に読みふけて、当時の国家検察当局とはまた別個の『温情主義的な』転向対策を工夫していた。」²⁵

多くの読者を引き寄せ、彼らを魅了したということ、彼らを幸福にしたということの間には千里の径庭があるということを知らなければならぬ。新渡戸は誰に対しても、やさしく接して温情あふれる姿勢をくずすことはなかった。

しかし、この新渡戸の手法は、所詮、地獄で辛酸をなめている人々を、現実世界で救済するものとはならなかった。それでも彼の修養論の役割があったとすれば、それは勝利者が敗北者への慰めを提供することであった。新渡戸の修養論は帰するところ、慰諭の唄であつたのかもしれない。

新渡戸や野間清治（講談社設立者）の活動を次のようにいう人もいる。

「新渡戸や野間の本を読めば、たとえ平凡で単調な仕事でもそれを一所懸命することが、将来偉い人になることの一步であり、それを除いて明日はないということであらためて説得される。修養は、いまの平凡な仕事をまじめにやるのが、将来、人にもとめられるし偉くなる道でもある。：（略）：だが、同時にたえ立身出世できなくとも人格や人物を磨いた満足感と爽やかさの大事さを教える癒しの文化でもあつた。：

（略）：そう、修養は、われわれは貧乏していても、他人さまにうしろ指さされることがない『かたぎ』（堅気）だという矜持ある清貧の物語を提供したのである。⁸⁵⁾

成功への階段を登りつめることの出来る人は極めて少ない。志を抱いても、夢を抱いても、その大半は途中で挫折するのが世の常である。その挫折者に対し、あるいは当初よりそのような夢さえ持てなかつた層に、この新渡戸の説教は、ある種の快適な子守唄に聞こえたかもしれない。その後、新渡戸は修養に閑して、次のような発言をしているが、これはどう評価すればいいのか。

「修養と云ふ言葉は七、八年前に大いに流行した。僕は其の当時或る雑誌記者に向ひ、修養を説くことは必要有益である、然し修養論は十年も続くまいと思ふと話したことがある。：（略）：修養を以ても満足しない者は、人間の深き高き欲望を達するが為に、最後の解決を宗教に求める事になる。之を踏台として高尚なる土台の入り来る可き精神界が開かねばならぬ時機に達して居ると云へる。⁸⁶⁾

注

- (1) 鶴見俊輔「日本の折衷主義―新渡戸稲造論」『近代日本思想史講座』(3)、筑摩書房、昭和三十五年、一八六頁。
- (2) 岩切重雄「一高時代の新渡戸先生」『新渡戸稲造全集』別巻、教文館、昭和十一年、一三三頁。
- (3) 宮坂広作「旧制高校史の研究―高自治の成立と展開」信山社、平成十三年、二五五頁。
- (4) 森戸辰男「教育者としての新渡戸先生」『新渡戸稲造全集』別巻、二九五―二九六頁。
- (5) 『新渡戸稲造全集』第七巻、教文館、昭和四十五年、六八一頁。
- (6) 同上書、六八五頁。
- (7) 増田義一「新渡戸博士の思ひ出」『新渡戸稲造全集』別巻、一七五頁。
- (8) 矢内原忠雄『矢内原忠雄全集』第二十四巻、岩波書店、昭和四十年、六八八頁。
- (9) 『新渡戸稲造全集』第七巻、一三三頁。
- (10) 同上書、二八頁。
- (11) 同上書、三〇頁。
- (12) 同上書、九四頁。
- (13) 山本漣之助「田舎青年」『山本漣之助全集』日本青年館、昭和六年、一頁。
- (14) 山本に対しては次のような評価がある。「同氏こそ明治以後の青年団の最大の恩人と称すべきである。新時代の青年団を徳川時代の若者制度の旧慣の上に建設した先駆者であったのみならず、あるいは官憲に訴え、識者を説き、ついに青年団をして今日あらしむるに至った主なる原動力を提供したので

あった。…(略)…日露戦争後ただちに、政府が初めて公文を以って青年団に触れきたったのも、内務省のそれでも、文部省のそれでも、ともに裏面に山本氏の努力が強く働いていることを知らなければならぬ。」(田澤義鋪「青年団の使命」『田澤義鋪選集』田澤義鋪記念会、昭和四十二年、二九五頁。)

「明治二十三年、十八歳の一地方青年であった山本漣之助氏が、『青年会ノ起ランコトヲ望ム』の一文を作り、また同二十七年には『少年会』を設立したことについては前に述べたが、日清戦後以降の山本氏の活動には目覚ましいものがあつた。氏は若連中の改造を単なる郷土の問題に止めず、これを郡の問題とし、県の問題とし、更に国家の問題に発展させた。まことに氏は我が青年団運動の黎明期に大きな足跡を残した先覚者であつた。」(熊谷辰次郎『大日本青年団史』細川活版所、昭和十七年、七七頁。)

(5) 山本漣之助『青年団物語』山本高三発行、昭和八年、六七頁。

(6) 非エリート層と国家の関係について、鹿野政直は次のように説明している。「帝國主義日本をささえるために、それまでもまして、底辺の人びとは肉体的精神的に動員されなければならなかつた。しかしかれらには、エリートとは別個の人間像が期待された。そうした人間像形成への熱意が、青年団運動を推進する官がわの起動力となつた。したがってそこにみられるのは、学歴のない(あるいは少ない)青年を教育する熱意にもかかわらず、かれらるばあくまでも非エリート層として固着させようとする意識であつた。」(戦後経営と農村教育―日露戦争後の青年団運動について―)『思想』岩波書店、昭和四十三年十一月、四五頁。)

- (17) 『新渡戸稲造全集』第七卷、九頁。
- (18) 同上書、五七頁。
- (19) 同上書、七六頁。
- (20) 同上書、二七一頁。
- (21) 宮川透は修養思想というものは、本来他律的なものではなく、あくまでも自律的なものであったにもかかわらず、そうならなかった事情について、こうのべている。「近代日本思想史を通過するとき、《修養》思想は、天皇制国家権力の強制力のもとで、日本人個々の内面的自律性を十分に確保することなく潰え去るか、あるいは国家権力が上から他律的に課した禁欲倫理を、内面的自律的なものに転換するという形で、客観的には忠良なる臣民の形成という役割を演じたことは否定できない事実であるが、しかしそのような帰結は、諸々の《修養》思想が全体として帯びていた批判機能の脆弱さの故にもたらされたものであり、《修養》思想に、本性上、そなわっていたものではなかった。」(『日本精神史の課題』紀伊國屋書店、昭和五十五年、一一九頁。)
- (22) 武田清子「新渡戸稲造の人格教育―理念と実践」『土着と背教』新教出版社、昭和四十二年、一六五頁。
- (23) 武田清子「キリスト教受容の方法とその課題 新渡戸稲造の思想をめぐって」、武田編『思想史の方法と対象』創文社、昭和三十六年、三〇一頁。
- (24) 鶴見、前掲書、一八七頁。
- (25) 竹内洋『立身出世主義―近代日本のロマンと欲望』日本放送協会、平成九年、二六一―二六二頁。
- (26) 『新渡戸稲造全集』第十卷、協文館、昭和四十四年、九二頁。

主要参考・引用文献

(新渡戸の著作は省略)

- ・山本瀧之助『田舎青年』(山本瀧之助全集) 日本青年館、昭和六年。
- ・山本瀧之助『青年団物語』山本高三発行、昭和八年。
- ・『新渡戸稲造全集』別巻、教文館、昭和十一年。
- ・熊谷辰次郎『大日本青年団史』細川活版所、昭和十七年。
- ・鶴見俊輔『日本の折衷主義―新渡戸稲造論』(近代日本思想史講座―発想の諸様式) (3)、筑摩書房、昭和三十五年。
- ・武田清子編『思想史の方法と対象』創文社、昭和三十六年。
- ・武田清子『天皇制思想と教育―国家主義と「国民主義」のあいだ』明治図書出版、昭和三十九年。
- ・武田清子『土着と背教』新教出版社、昭和四十二年。
- ・鹿野政直『戦後経営と農村教育―日露戦争後の青年団運動について』(思想) 岩波書店、昭和四十二年十一月。
- ・松隈俊子『新渡戸稲造』みすず書房、昭和四十四年。
- ・宮川透『日本精神史の課題』紀伊國屋書店、昭和五十一年。
- ・神原良平『大平洋の架ヶ橋 新渡戸稲造』ばるす出版、平成四年。
- ・花井等『国際人新渡戸稲造―武士道とキリスト教』広池出版、平成六年。
- ・筒井清忠『日本型「教養」の運命』岩波書店、平成七年。
- ・坂本多加雄『知識人―大正・昭和精神史断章』読売新聞社、平成八年。